

令和三年度 橘学苑 文芸コンクール

かながわ高校文芸コンクール

○【俳句部門】最優秀作品

中学二年

無観客 色どりそえる セミの声

○【短歌部門】最優秀作品

高校三年

夏の夜 歓声の無き競技場 五輪の聖火 静かに燃えて

○【短歌部門】かながわ高校文芸コンクール 高文連会長賞（優秀）

高校一年

好き嫌い気持ちもろもろゆれ動く

離したくない話したくない

○【詩部門】*かながわ高校文芸コンクール（佳作）

高校三年

「彼の世界」

彼にしか見えない世界がある。

彼の世界は晴れの日の空のように澄んでいる。

彼はそこで目を瞑る。

たった一人しかない世界で

目を瞑る。

時間が止まったとき、

彼はこの世界が

偽りであることを知る。

彼は目を開ける。

彼の世界が崩れ落ちる。

彼は暗闇に落ちる。

彼はそこがよく知っている場所だと気づく。

いや、ずっと前から知っていた。

暖かい。

彼はこの世界が幸せであることを知った。

ここで、生きていかねばならない。

○【小説部門】最優秀作品

高校三年

ぴちよんと川の流りに逆らって、ひとつ、ふたつと波紋が広がる。誰かが石を投げた訳でも、雨が降ってきたわけでもない。

「とれたぞ！」

嬉しそうに今し方とったばかりの魚を持ち水の上に立っているのは、この世ならざるもの。人とはそもそも基本性能の違う存在で妖怪というやつである。中国の達人は枝一本で水の上に立つという話も聞いたことはあるが、それも本当かどうか……。まあ、その辺はもう気にしないことにしている。夢かもしれないし、現実かもしれないけど、その辺もどうでもいい。俺が妖怪と関わった記憶はなくなることが保証されているからだ。

祖母はギリギリ旅館と呼べる小さな宿泊施設を営んでいる。俺は長期休みを利用して祖母の手伝いに来ていた。——というのは建前で、本当は両親の間に流れる気まぐれな空気に耐えられず、家から逃げ出した。

今度こそ無理かもしれない

そんなことが頭をよぎる。俺が幼い頃から両親の喧嘩が絶えなかった。父は考え方が古臭く、何かある度に「誰に食わせてもらっていると思ってるんだ」と頭ごなしに言ってくる。母はそんな父に言いくるめられるのが嫌でパートを始めたが、家事とパートの両立の苦しさから不機嫌になることが増えた。それでも最初はまだ良かった。お互いに言い合って、耳を塞ぎたくない事もあったが意見が言い合う事だけいいと今になって思った。

今、あの夫婦の間に言葉はない。俺たちの背景に家庭が見えなかった。

それを知ってか知らずか、祖母は笑顔で俺を向かい入れてくれた。昔から祖母のことが大好きだった。優しく、でも厳しくて。だからここに遊びに来るのが好きだった。

「働かざるもの食うべからず」と、その日も祖母に頼まれ買い出しに行っていた。帰り道、近道をしようと森へ入った。

「すみません」

もうすぐ昼休みというところで、若い女性客に声をかけられた。

「どうされました？」

「クーラーが動かなくて……。ちょっと見て頂けませんか？」

女性は申し訳なさそうに眉をひそめた。本当に故障なら俺の出る幕はないが、割とそうでもないことが多いのだ。そもそも客がチェックアウトした後一通りというのはチェックしているし、業者もこまめに点検しているからクーラーが動かない原因が故障というのは稀だ。実際のところ自分の家で使っているリモコンと微妙に違う所為でっていうのが大半を占めている。だから、この人もそうだと思い、快く引き受けた。

「見つけたぞ」

「えっ……」

女性の部屋に入ってすぐ、俺は壁に叩きつけられた。抜け出そうにも抜け出せない。尋常じゃない力。

「昨日、森に入ったな。」

昨日？ 森？ 入りはしたけど……。

「ん？ お前、記憶が欠落しているのか？」

女性は突然、俺の目を覗き込んだ。

「運が良かったな。どうやら命拾いしたようだ」

ふっと俺から離れ、面白そうに女性は笑った顔をした。何がどうなっているのかわからず、でもどこから聴けばいいのかもわからなかった。しばらくして先に口を開いたのは女性の方だった。

「はじめよ、人。我が名は結。妖なり。」

ふわっと女性の服が洋服からキレイな着物へと変わった。

「我々は汝と話がせばや。大人しくつきこば殺しはせず」

俺は首を傾げた。さっき言ったことはなんとなく分かったけど、今は「殺しはせず」という物騒なところ以外よく分からなかった。それに、多分「結」と名乗った彼女は気付いたらしく親切に言い直してくれた。

「私はお前と話がしたい。大人しくついてくれば殺しはしない。」
まるで社交辞令のような笑みに俺は一步後ずさり再び壁に背中を打った。

「それで？どこまで覚えている？」

昼休憩を利用して、彼女に言われるがまま旅館を後にしとぼとぼと歩く。

「昨日は森に入って……」

彼女に急かされて思い出したのは、断片的で不思議な記憶。自分の記憶なのかも曖昧だ。

「森に入って、何か黒い物体に追いかけていた気がする。それから白い尻尾のある女の人に助けられた」

「白い尻尾……これか？」

出てきたしっぽに何気なく答えたが、正しくそれだった。驚いた俺を氣にとめることなく彼女は不貞腐れたように顔をしかめた。

「助けてやったのに、脱兎のごとく逃げ出さなくてもさあ」

「どうやら俺は彼女に助けられたらしい。」

森に入っただけ、いつもとは違う景色が広がった。ただ木々が生い茂っているだけで、あとにも先にも住宅地などが見当たらない。そこで俺はここが、いわゆる“妖怪の世界”だということに気がついた。彼女はどんどん先へと進んでいき、ある大沼で足を止めた。彼女の「おーい」という呼びかけで出てきたのは男だった。皮膚のところがどこかに鱗がついた。

「こいつは蓮。記憶を操作する妖術を持っている」

蓮と紹介された彼は俺のことを足のつま先から頭のとっぺんまで見た後、興味がないと言いたげにそっぽを向いた。

「お前のようにここに迷い込んだ人間は普通、生きて返してはいけない。でもそれは可哀想だなんて。わざと入ったなら話は別だけどさ、もともとこっちの結界が緩んでたわけだから」

「結界？緩む？その前に生きて返さないっていわなかった？」

「だから、蓮に記憶を消してもらおう。それでこの件はなかったことに」

つまり、俺の何の役にも立ちそうにない断片的な記憶を消してもらえば平凡な生

活に戻れるということだ。

結論から言うと、記憶は消えなかった。消えなかったというか、とある妨害により消すことが困難になった。

「おい、どういことだ」

キレかかっている蓮さんを横目に彼女は楽しそうだ。そして俺に向かってこう話した。

「お前は昨日、記憶を消す前にこの森から出た時点で私が殺すことが決定されていたんだけど、どうやら誰にも話してないみたいだし、そもそも断片的にしか覚えてないし、これも何かの縁だ」

“黄昏時には森に入ってはいけないよ”

そんなどっかの田舎の決まり文句のようなことがここでは言われ続けている。「神隠しに合うよ」「お家に帰れなくなるよ」と。まあ、要は「暗くなる前には帰ってきなさい」という意味で、それ以上でもそれ以下でもないと思っていた。でもこの時、迷信は侮れないことを知った。

「お前にはもう少し付き合ってもらおうよ」

「とれたぞ！」

何度これが夢であれと願ったのかわからない。誰かに話せば即死刑執行。まあ、友達に話したところで「何言ってるの？」と言われるのは目に見えている。それにまだ死にたくはない。

「あのさ、常々思うんだけどそれどうするの？」

とれた魚を指差す。

「食べる」

彼女はさも当然のように言った。

「妖怪って基本的に食べなくても生きていけるって聞いたんだけど」

「人間だって食後に、でぎーと？食べてるだろ。それと同じだよ」

それは同じなのかと疑問に思ったが、どうせこの記憶も消えるのでほっとくことにした。

「俺そろそろ戻る。昼休憩終わるから」

「おう、また明日な」

こっちの世界にいる時は人に化けているらしく、尻尾はなく俺以外の人にも彼女の存在は認識される。

彼女の「付き合ってもらおうよ」という言葉に拒否権はなかった。断ったら殺すが、手伝えば全て終わり次第彼女達の記憶を消し平凡な日常に戻すとのことだった。

手伝いとは、当初よく分からなかった結果に閃くことだった。

この地域に張り巡らされた結界は全部で十四ヶ所。それが全て張られて初めて結界の意味をなす。それがなければ俺のように間違っ入り込む人が割といるらしい。彼女から渡された地図には結界の場所が印されているのだが、それがあまりにも情報量の少ない地図でその解説に付き合わされている。朝の早い時間や、休憩時間、シフトが休みの日に手伝わされることになった。

森の入り口には小さな祠がある。中を覗くと狐の石像が一匹入っている。その油揚げを供えるのが祖母の週課だ。スーパーで買った値引きされたものだが物好きもいるようで週一ペースで供えているそれは、新しいものを持っていくと古いものになくなっていくらしい。今日一日、シフトが休みなので彼女の手伝いのついでに俺が供えにいくと、それは瞬時に姿を消した。

「罰当たりな」

その代わりに美味そうにそれを食べる彼女がいたわけだが。

「何を言う。これは私の祠だ。だからこれは私のものだ」

嬉しそうにしゃべりを振っているのは犬にも見える。彼女の尻尾は今のところ三本まで見たことがある。全部で何本あるのかは知らない。

「祠は荒らすなよ。これには悪いものが入っているからな」

「悪いものって？」

祠堂らしをする動機も度胸も俺にはないが悪いものと言われれば多少気になる。

彼女はごそごと祠の中から何かを取り出した。出てきたのは点数の悪いテスト。こんなところに隠す人もいるんだなと思った。

「な？悪いものだ」

にっこり笑った顔を見て、彼女の意味する悪いものはこれではないと何故だか確信できた。

「嫌だ」

基本的に結界の張り直しは彼女しかやっていない。他の妖怪は人に化けられないとか、人の世界……人そのものが苦手な妖怪が多いらしい。蓮さんもそのひとりだ。「俺は嫌だからな。」

「じゃあ、結界は張られませんか！少しは手伝ってよ。蓮だって人間に化けられるだろう」

蓮さんは俺を見てちつと舌打ちをした。まあ、人が苦手なのだから仕方ないことだが、こうもあからさまに嫌われると少し凹む。

この地図の読解が難しいのは小学生が書いた宝の地図のようなものだからということももう一つ理由がある。それはやはり、時の流れには逆らえないということ。そこに新しい建物が立つと地形が変わっていなくなったとしても迷わずにはいられないだろう。

今日の結界場所はダムだった。水の中を好む蓮さんが確かに適任だったので蓮さんには申し訳ないが来てもらった。前はまだ建設中で水は溜っていなかったらしい。「キレイだな」

ダムの水が太陽の光に反射してキラキラしている。人が立ち入るような場所ではないから、静かだしゴミも落ちていない。

勿体ないな……。

「こんな記憶、消されるなんて勿体無い。そう思ったか？」

蓮さんが水の奥まで潜っていくのを見送ったあと、暇そうに待っていた彼女は俺の心を読んだかのようにだった。

「そう、だな」

否定はできなかったが、俺は記憶を消されると殺されるのどっちを選ぶかを聞かれたら、否定せざるを得ない。

「私はな、別に妖だけの世界。人間だけの世界って区別はなくてもいいと思うんだよ」

もともとはこの世界は分かれていなかったと初めて会った時に聞かされた。妖怪がこの世に生まれたのは奈良時代。干ばつや地震、疫病が続く大仏が造られたのがはじまりだったようだ。その後人々の思いから様々な神が造られ祀られてきたが所詮は人の創造物に過ぎなかった。真の神にこそなれないがそれなりの力を持ち人々の

生活を支えていた。しかし、時はめぐるもので少しずつ妖怪の存在は忘れ去られていった。そんなことがありこの世が分けられたのは、丁度幕末、大政奉還の頃だった。その影響なのか元号が変わる度に結界が緩み、張り直しているらしい。

「結が生まれたのも奈良時代？」

「そうだよ」

幕末は、あたり前だけど奈良時代の前だ。そうするとひとつだけ引つかかっている。人的に張られた結界であるが、彼女はこの世を分けた人を知らない。それは何故か。

「何故だろうな」

「え？」

「私も気になっていたんだよ」

もしかしたら彼女の妖術は人の心を読むことなのかもしれない。

「本当に何も知らないのか？」

「ああ、ちょうどその辺の記憶が私にはないんだよ」

さあっと冷たい風が吹く。まるで踏み込んではいけない線を越えてしまったように。その先の進入を拒むように。

「不思議だと思わないか？お前は気にならないのか？」

「気になるけど、やめとく。変に入り込んで殺されるのは嫌だからな」

「ふーん」と彼女はつまらなそうに俺をにらむ。

「ガキの癖して妙なところで気を遣うんだな。気持ち悪い」

「なっ、なんだよ。失礼だな」

「別に」

それ以上会話は続かず、びしょ濡れでダムから蓮さんが出てくるまで木々がこすれ合う音しか聞こえなかった。

残るところ、結界はあとふたつとなったこの調子なら俺がここにいる間に終わらせて安心した。これで終わらずに毎週通う羽目になったらまったものではない。

「あ、恵さん。こんにちは」

恵さんは惑星を滅ぼすことのできる妖術を持っているらしい。しかし、あまり需要のあるものとは言えなく結と蓮さんには無能と揶揄されていた。ちなみに、最近

はその妖術が派生して生き物を殺すことができるようになったらしいが、心優しい恵さんはそんな事しないので再び無能と揶揄されていた。

「久しいな。息災か？」

「え、あ、はい。……息災？です」

あまり人嫌いでもないらしく、俺とも普通に話してくれる。

「今日も結の手伝いか？」

「はい」

「すまないな。結のわがままに付き合わせてしまって」

「いえ……」

恵さんはこんな風に人の世界をふらふらと散歩したりしている。彼の背中には鳥の羽のようなものがついていて空も飛べる。

「恵さんは、その、結界の張り直しはされなんでしょうか？いつも結がしますけど」
蓮さんと違い人を嫌がらないのなら彼女の手伝いもできるだろう。面倒くさいからやらないというタイプでもないし。

「ああ、私は結界張れないのだ。こういう妖術だからな。造る系に適していなくてな」

「そう、なんですな……」

一度、彼女の手伝いをして全ての結界を張り直す羽目になったという話を聞いて絶対に手伝わせないようにしようと心に決めた。

「あ、河童。あの河童はなんて名前なんですか？」

少しの話の隙間にも耐えられず、適当な疑問をぶつけてみた。

「ん？あやつに名はないな。強いて言うなら河童であろう」

名前がない？

「普通、妖は人間のように名はつけぬ。私達には主がいてな、主が名をくれたのだ」

「あ、そうだったんですね」

その主さんは今、それは聞かなかった。

「あのひとは私達にとって、よき主であった」

「あー終わったー」

ぐーっと伸びをする彼女につられ、俺も軽く体を伸ばす。

「あとひとつか。その場所は分かっているのか？」

地図に書かれているのは十三ヶ所。結界は全部で十四ヶ所。足りないのだ。

「知ってるぞ。あそこは地図に書くまでもないのだ」

我ながら良くやったものだ。祖母の手伝いと彼女の手伝い。何か良いことがあって
もいと思う。

「それにしても惜しいな」

「なにが？」

「結界だよ。人間の夜と妖の世、繋がっていても悪くなかっただろう」

「んーなんとも言えないけど、確かに分けなくてもいいんじゃないかとは思ったな」
「だろ」と人に化けたまま尻尾を出すものだから慌てて頭をはたく。周りに人がい
なくてよかった。

「私は張り直してという行為に意味があると思うのだよ」

「意味？」

「そう。私はその意味を常にスルーしているわけだが」

先程はたいした頭を押さえて恨めしそうに見てきたので「勿体ぶるなら聞かないけ
ど？」と言うと、大人しく話しはじめた。

「私は常に選択を迫られている。結界を張るか張らないか。この世を分けるか分けな
いか。別に分けないからってどうなることでもないからさ」

確かに、他の人に妖怪の姿は見えないらしい。俺だって森に入らなければこんなこ
とにならなかつたくらい無関係だったし。

「何故、分けたんだろうな」

それは誰に向けられたのでもない疑問のようで、彼女の気持ちとは対象的な真っ
青な空が眩しかった。

「あっ」

「ん？どうした？」

森まであと少しというところで、突然の声に足を止めて振り返った。しゃがみ込んだ
彼女は妖怪の姿に戻って、何かを抑えるようにうずくまった。どうすればいいのかわ
からず動けなかった俺だったが、「結っ」と焦った声に反応してそっちを見た。恵さ
んだった。

「なぜ…なぜだっ、何故お前たち人間はそんなにも我等を憂さ晴らしの対象にす

る」

いつも穏やかな恵さんの大きな声に驚いた。それからその目線の先にいるひとり
の女性にも。雲ゆきが急に悪くなる。

「お前等が願ったくせに。お前等が造ったくせに、壊すというのか」

壊すという言葉で気付いた。祠が壊されていることに。あそこには悪いものがあ
る。荒らしてはいけない。ただの脅しではなかった。

「私は人間など、今ここで殺しても構わないのだぞ」

空気が重い。恵さんからの圧で押しつぶされそうだ。
でも止めなきや、恵が殺してしまう前に。そう思った。

「まっ、待ってください」

俺は女性を庇うように立ち塞がった。

「そこをどけ。お前も殺されたいのか」

ここで俺はカツコつけられるような奴ではなかった。恵さんを止める説得すらも
できなくて。

「よう」

ここで最も来てはいけないであろう、蓮さんが現れてしまった。

ああ、もう駄目だ。人間嫌いの蓮さんならためらいもなく殺すだろう。

でも、あろうことが蓮さんは恵さんと対立する形で俺の前に立った。

「主の教えを破るつもりか」

落ち着いた声だった。誰を責めるのでもなく静かに。

「主を守れなかった今、私は結まで失いたくはない。もうこれ以上、人間の所為で崩
れてゆく結は見たくない。

「俺はあの時、最後まで主の式として恥じぬ行いをした。守ったよ、俺等は。主の言
葉を」

何の話かはよく分からないが、少し恵さんの圧が和らいだ気がする。

「お前、この処理は頼んだぞ。人間のやり方で片付けておけ」

蓮さんはそう言うのと、女性の頭を軽く触る。

「何を？」

「記憶を消したんだよ」

その声を最後に蓮さんたちはいなくなり、その代わりに祖母が出てきた。事態はた

だの祠荒らしということで収まった。

祠を荒した女性に、彼氏に振られてイライラしてやってしまったと話した。仕切りに「ごめんなさい」という女性は深く反省しているようだった。

祠は近くの神主さんが修繕してくれるそうで、一週間森に近づけなくなってしまう。このまま勝手に境界が張られてしまうかもしれない。そして俺の記憶も消え万事解決だが、いくら忘れるといっても目覚めが悪い。そうこう考えていたが、思わぬ来客が訪れた。

その夜、俺は宿泊客が寝静まった頃露天風呂に浸っていた。その時、風呂からぶくぶくと泡が出てきて、次の瞬間蓮さんが何食わぬ顔で出てきた。

「うわあっ」

「うるせえ、静かにしろ」

「あ、すみません……」

驚いた。心臓が止まるかと思った。

「この風呂、なんでか知らねえがあの沼と繋がってるんだよ」

それって繋がってても大丈夫なものなのか？そんな疑問より気になることがあった。

「あのっ……」

「結なら大丈夫だ。恵も。悪かったな、巻き込んで」

「いえ……」

ここで、この先に踏み込まないものは優しさか、それとも逃げか。

「あの、聞いてもいいですか？世界を分けた時のこと。結の記憶がないこと」

蓮さんはしばらくの間月を見つめて、それから俺のことを真っすぐ見てくれた。

「ああ、今日はそれを話しに来たんだ」

「俺たちの主は彩という村娘だった。陰陽師家の分家で妖を見、扱うことができた。俺と恵はもととその家に仕える式だったが、主が彩に代わり名をもらった。大事にしてもらったんだ」

そんなある日、村に噂が流れだしたそう。誰かが禁忌を犯したと、村に災いが訪れると。それが結だったそう。もともと九つの違う祠の妖で人間の所為でひとりの

妖にされた。しかし自分の力を抑えられず暴走。それを助けたのが彩さんだった。

「主は結を拾い、名をつけ、自分の妹のように可愛がっていた」

それから時は流れ、人々の神への信仰心は薄れていき、消されてしまう神。妖が出始めた。そこで世界を分けたそう。彩さんが妖怪を救ったのだ。消滅の危機から。「境界がゆるみ、主の家に行ったことがあったが、そこには主の血縁者はいなかった」

その後、彩さんの死の経緯も全て分かったそう。神への侮辱だといって村人に殺されたとき、怒りは沸いてこなかったと蓮さんは言う。

「妖の存在が見えない連中ってのはそんなもんだ。主も覚悟の上で、俺達を守ってくれた。だから」

だからせめて彩さんの教えは守ると決めたそう。

「でも結にはまだ主が必要だった。主の理不尽な死を受け止められるようになるまでと、蓮さんと恵さんは彩さんに関わる記憶を消す決断をした。」

「俺の妖術が解かれるのも時間の問題だった。結の膨大な妖力を抑えられるのは主くらいだから。結局、俺は結を救えたのかも分からねえ」

「救われていたと思いますよ。真実が隠されていたことは、自分を守るためだったって結はきつと分かっています」

蓮さんは驚いた顔をしてそれから俺の頭に手を置いた。一瞬記憶を消されるのかと思ったが、優しく撫でられただけだった。

「生意気なガキだな。でも、ありがとな」

彩さんが何を思って名前をつけたのか、今ならちよつと分かる気がした。

「おっ、来たな」

「何、してんの？」

彼女は新築の自分の祠からまたもや怪しげなものを取り出そうとしているのだろうか。

「探し物つと、あった」

「できたのは勾玉だった。」

「これは私の一部だよ。彩に拾われる前に背負ってた邪の部分。これは記憶を取り戻す鍵になってた訳だ」

彼女はそれをそっと懐にしまった。

「全部思い出したのか？」

「ああ」

「大丈夫か？」

「もう大丈夫だよ。ちゃんと背負っていける」

それを聞いて安心した。

「最後の結界、張ることにしたんだ」

「残念ながらな。この世は分かれている方が何かと都合が良いみたいだ」

蓮さんと恵さんにもさつき会った。記憶消えるのに律儀だと笑われた。

「別に分かれているのが悪いってことでもない。越えてはいけない線の外だからこそ、うまくやっていけることもある。」

「そうだな」

「世話になったな」

彼女は自分の祠に手をかけた。そこが最後の結界場所というわけだ。

「すくよかに」

今年の長期休みは目まぐるしいものだった。でもそのおかげで、いい小遣い稼ぎができたので満足だ。

もうすぐ家に帰らなければならぬが、不思議と前より嫌ではなかった。境界線のその先を越えなくてもいいことを今は知っているから。